

守護役と中世村落

牛 尾 浩 臣

はじめに

室町期における荘園崩壊の要因は、守護と国人の侵略によるものだと考えられている。しかしながら、守護と国人の荘園侵略の実態については、いまだ十分に明らかになっているとはいえない。その上、室町期にすべての荘園が有名無実になったわけではなく、畿内近国のいくつかの荘園は、戦国期に至るまでその命脈を保っている。従来の中世後期における荘園研究は、荘園制の崩壊という流れを歴史的背景と理解し、多くの成果を生み出してきたが、そのような考え方のみでは、荘園が戦国期まで存続した意味について消極的な評価しか与えることができないと考える。

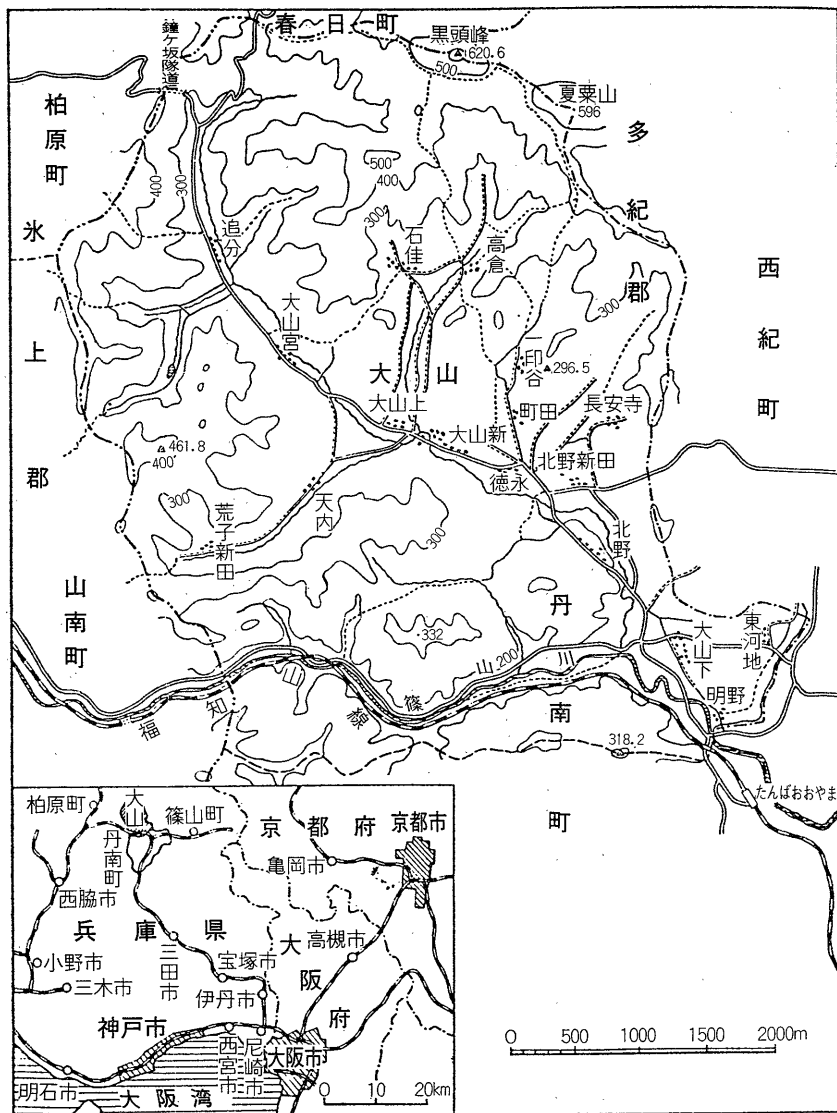
そこで本稿では、在地における守護役の収取状況を通して、守護の荘園侵略の具体的様子にせまるとともに、それに対する荘園領主・百姓の動向をおうことにより、守護・荘園領主・百姓三者の葛藤の中から、荘園が戦国期まで存続した意味について考えてみたい。

守護役とは、室町期の荘園関係の文書にみられる守護から賦課される諸役の総称であり、その主なものとしては、段銭・夫役がある。

一章 守 護 役

守護権力の経済基盤としては、従来段銭がその主なものとして考えられてきた。従来の段銭研究は、百瀬今朝雄氏の「段銭考」に代表されるごとく、朝廷の持っていた段銭賦課権をいかにして、また、いつ幕府や守護が獲得したかといった点を解明したものと、田沼陸氏の研究に代表されるごとく、公田体制と守護段銭の成立を考察したものとの二つに大きく分けられる。しかしながら、段銭についての研究は、一九六〇年代のものが主であり、一定の到達点を示したこともあって、最近の研究ではほとんど取り上げられていない。そこで本章では、これら先学の成果に学びながら、従来の研究では不明な部分の多い在地における段銭の収取状況の実体に迫るとともに、従来段銭に比してあまり重要視されなかった守護夫役についてもあわせて考察してみたい。

ただし、守護役に関する史料がまとまって残っている荘園がほとんどないため、史料の都合上、東寺領荘園、中でも大山庄を考察の対象とした。図①のように、大山庄は、現在の兵庫県多紀郡丹南町の北部に位置し、庄の中心部を流れる大山川に向かって開いているいくつかの山間の小さな谷に耕地の開けた典型的な山間荘園である。大山庄は、承和二年（八四五）東寺領荘園として立券、永仁三年（一二九五）に、地頭中沢氏との間に下地中分され、一井谷（田^{いづみ}地一四町四反一〇代・畠地三町）・賀茂^{あき}（田地一町八反三五代）・西田井（田地八町七反五代・畠地二町）の三カ所（合計田地二五町・畠地五町）が、領家方として南北朝・室町期を迎える。一井谷（一院谷とも書かれる）とは、現在の一印谷のことであり、賀茂^{あき}は、一印谷から東河地への通路の辺りにあったようである。また西田井は、東河地の内にあった。南北朝から室町期を通して丹波国の守護^{（6）}の変遷を概観してみると、十四世紀前半は仁木氏、後半は山名氏、明德二年（一三九二）明德の乱で山名氏が滅ぶと、以後戦国期まで細川氏が守護を務める。そして大山庄への守護の侵略が史料にあらわれ出すのが、一三五〇年代、仁木頼章の時代からである。大山庄では、貞治四年（一三六五）に半済が



図① 大山村（現在南丹町大山地区）図
宮川満編『大山村史』本文編所収の図を転載。

行われるが、この半済は応安元年（一二三八）の寺社一円仏神領などにおける半済禁止の幕府の法令により停止される。しかし、この半済以後、大山庄では守護による莊園侵略が本格化してくる。以下、大山庄における段銭と夫役を中心に考察を進めていきたい。

(1) 段銭の収取状況

大山庄における段銭では注目すべきことは、すでに指摘されていることであるが、守護段銭の存在である。次の史料は、それを示すものである。

(8)

（尚々書略）

重而進申候。仍昨日配符答ニ国方へ罷出候処、彼配符分者、公方反銭と御屋形要脚と二分にて候。配符ニハ其々謂不申候由被申候間、為御心得、重而致注進候。公方様御分者、京済ニ以前はや御沙汰の様ニ及承候間、さ様ニ御座候へ、御請取を内藤方へ御遣候て、一円ニ京済ニ御任事も御座候敷。不然者、国にて半分可被納之由郡代へ内藤方之折帛を被召候て、可有御下候。只、公方之請取計自然御下候ては、郡代定不可致承引候。若又折帛難渡候て遅引候者、公方之御請取ニ寺家之御書下を御副候て給候て、使人候者、任事をも申延候て見候へく候。地下分ハ国済ニ成候へて不可叶候者、早々一人御下候て、且も納所させ候へく候。使人候てハ一大事候。急々御左右可承候。恐々謹言。

御代官岡

十二月十四日

弘 経（花押）

東寺御公文所御坊

（傍線筆者。以下同じ）

この注進状は、大山庄代官岡弘経が長祿元年（一四五七）東寺公文所に宛てたものである。この中に「公方段錢」とあるのが幕府段錢であり、「御屋形要脚」とあるのが守護段錢である。また後掲の同年の段錢配符の端裏書にも「大山庄段錢配符 半分ハ公方段錢 半分ハ用脚段錢」とある。このように守護段錢は、幕府段錢と同時に賦課されており、そこから守護段錢の成立を、實際在地において段錢収取にあたっていた守護が、幕府段錢賦課を背景に、その實力を生かして成立させていったものだと考えられている。また、大山庄における守護段錢は、田沼氏によれば、一五世紀なかばから恒例化し、貫高も二〇貫文と定額化してることが指摘されている。

次に大山庄における段錢の収取機構と経路、およびその手続きをみてみたい。

（12） 尚々、段錢奉行ハ不下候。郡代産田之式部方より配符入候。可有御心得候。返々遅々候てハ、大使可入候。早々御下あるへく候。国萬物忿ニ候間、京濟ニ御忤事候ハ定可成候哉。可然様御申あるへく候。

国方御要脚段錢之配符、夜部五時分被入候。則相副注進申候。無余日候間、催促之儀、事外きふて候。早々御免除可有御申候。さ様候者、地下事ハ涯分責伏候て運送可申候。若国済成候者、御本所分此者ニ早々可有御下候。

（中略）

大山庄岡彈正忠

十二月十三日

弘 経（花押）

東 寺

御公文所御坊

この注進状は、先掲の注進状の前日に書かれたものである。この二通の注進状を通して段錢賦課の状況をみてみると、「段錢奉行ハ不下候」とあるように、通常は、まず段錢奉行と呼ばれるおそらく在地での段錢執行官としての役目を負った者が京都から下向していたようである。またこの時のように段錢奉行が下向しない場合は、郡代（郡奉行・郡

使とも呼ばれる）が代行するようになっていたようである。そして続いて段銭の額と納期を記した次のような配符が在地に入れられる。

〔¹³（増纂書）〕大山庄段銭配符 半分ハ公方段銭 半分ハ要脚反銭 長禄元

御要脚析 段銭之事

合段別百文宛（以下略）

右、今月十九日以前可有宛済候。若、於無沙汰之在所者、可注申旨、被仰下候。仍、配符、如件。

長禄元年十二月十二日

（花押）

大山庄東寺領分

配符が入ると先掲の二通の注進状にみられるように、在地の代官から東寺に対し京済か国済かの決定を問い合わせてくる。東寺は、守護権力の領内への侵入をできるだけ阻止するため、守護へ「侘事」などの賄賂を送り京済にしようとする。京済が決定すると、段銭は、在地から東寺へ、東寺から守護・幕府方へと納められる。この時、東寺から守護・幕府方に対しては、次のような段銭送進状が送られる。

送進¹⁴ 東寺領丹波国大山庄御用脚段銭析足事

合拾貫文者

右、為京済分、所送進、如件。

東寺雜掌

長禄元年十二月廿一日

そして、段銭の納入が完了すると、「公方之請取」と、最初の代官岡弘経の注進状にある幕府からの段銭請取状が東寺へ送られる。

京都で東寺と守護・幕府方との間で交渉が行われている間、在地でも守護使の入部を阻止する行動が取られていた。その行動を示しているのが、次の大山庄代官稲毛修理亮の書状である。

⁽¹⁵⁾
一日委細令申候。段銭の事、ゐせひ候へず、きふく候て、やかて使入候へきよし申候之間、やうやうわひ事仕候て、御左右の間、使をへしへらくふちすへきと申、香西方折帛をとりて下て候。ひさしくはまち申ましきよし申候とて、又御百姓罷上候。此度ハ大略寺社免除候やうに及承候。昨日 公方へも被仰候て、地下をも御扶持候ハ、目出度畏入存候。尚々使入候てハ、地下のしやうかいたるへく候。いかようにもきつそく被仰候てハ使入候へく候。(中略) 尚々段銭の事、早々公方へ被仰候て、折帛めされ候て給候ハ、畏入候へく候。いま二三日使候ましく候よし申上候。恐々謹言。

人々御中

□□(花押)

この書状で、「使」と出てくるのは、守護使のことである。大山庄では、守護使のことをその他に「大使」^{おまつかい}とも呼んでいる。守護使とは、段銭の納入が遅れたときに、在地に入部し、地下を催促し、段銭を徴収する強制執行官のような役目をもった者だと考えられる。守護使の入部に対し、代官や百姓たちは、守護代の香西常建に「やうやうわひ事仕候て」守護使の入部延期を図る一方、「尚々段銭の事、早々公方へ被仰候て」と、段銭の免除を幕府に働きかけるように、東寺に訴えている。在地の守護使入部の拒否の意思は、「尚々使入候てハ、地下のしやうかい(生涯)たるへく候」という代官稲毛の文言によくあらわれている。また、先掲の注進状でも代官岡弘経は、「使入候てハ一大事候」と、守護使の入部に危機感をつのらせている。莊園領主が段銭の納入方法を国済ではなく、京済にしようとするのは、莊園領主が守護権力の莊内への侵入を阻止し、その一円支配を守るためだと考えられており、このような守護使入部阻止の代官たちの行動も、その一環とみることができる。しかし、それは、莊園領主方からのみかたでしかなく、百姓を含めた地下が守護使の入部に反対する積極的な理由とは言えない。地下が守護使の入部に反対した理由は、

実は守護使の入部が地下にとつて段錢以外にかなりの負担になっていたためである。次の注文は、享徳二年（一四五三）大山庄に段錢六貫文余が賦課され、守護使が入部したとき作成された段錢入足注文の一部である。

⁽¹⁶⁾ 注進

一院谷段錢方入足文事

（中略）

一、大使新

三貫文　これハ大使を以てさいそくの時わひ事入足也。

五百文　京済折かミ付候時

四百文　そうしやへ

（中略）

一、五町反事ニ使を入候時下用事

七日

廿一人　三石一斗五升　左衛門所にてたわらをとり出候てうりかい候。

八日

廿五人　三石八斗ゆやの上かもん所にてたわらをとり出候てさんさんにつかい候。

二百文　同　在所にて入足

九日

廿一人　七斗　大江かもん所にて

四百五十文同入足

十日

廿六人 六斗 馬のかゆ天神衛門出

一貫百文さうよう入足

十一日

廿人 三斗 大夫大郎出

代六百文 さうやう入足ゆやの上かもん出

又三百文 まこ三郎出候さうし

(後略)

この注文によると、意味の不明な部分もあるが、まず「大使祈」として、守護使への侘事のほか、合計三貫九〇〇文が計上されている。また、守護使が在荘していた間の諸経費として、「五町反事ニ使を入候時下用事」として、人夫・俵・雑用などを五日間にわたり、それぞれの百姓たちが負担している。また、永享三年(一四三一)篠村段銭が大山庄に賦課されたときも、「段銭御使入目雑事」として、飯米・餅米・大豆・小豆・馬粥・柄豆・酒米・芋などを百姓たちが負担している。同様の例は、同じ東寺領である新見庄でもみることができる。

(18)
(尚々書略)

守護使 六月廿五日より七月十四日まで廿日之間入あしの事

一、毎日貳百文 朝夕分、使入数九人、御代官・三職一日ツ、是を沙汰申候、

一、壹貫五百文 しゆんつけ、是ハ本位田沙汰、

一、六百文内 三百文ハ同、三百文ハ三職

一、四貫文 朝夕分

一、菅貫文之太刀一ふりは本位田方太刀也、

一、五百文ハ三職方沙汰申、

以上七貫六百文

日別をハ、廿貫文と申、事外さいそく仕候へ共、色々りやうけんを至候て、太刀一ふり新足五百文にて、七月

廿一日ニ守護の使罷立候、(中略)

九月廿一日

衡氏(花押)

家高(花押)

盛吉(花押)

家盛(花押)

東寺

御公文所殿

人々御中

この注進状は、寛正五年(一四六四)御讓位段銭が新見荘に賦課された時のものである。この注進状によると、この時は、六月二五日から七月一四日までの二〇日間、守護使九人が入部し、その在荘中の費用を上使本位田家盛や、三職である田所金子衡氏、公文宮田家高、惣追捕使福本盛吉などが負担している。また、この間の事情を三職らは東寺への別の注進状で次のように述べている。

(19)

(前略)

一、守護使大勢付申候時、御百性中ハおつ立申候ハんと寄合仕候、さやうニらうせき仕候てハ、寺家御為、地下の為、一大事と存候て、政所殿我ら三人として、一七日まであいしらい申候、其外度々守護代へ人を出候路銭

と申、又しゆんつけ札銭と申、又使ニわひ事仕候て、立候し時、日別使銭と申候て、大儀ニ申候しお、我ら三人度々罷出候て、かたくわひ事を仕、太刀札銭共出候て、立申候し、是おハ政所殿、我ら三人ニ御ふち候へてハ、いかゞにて候、(中略)

十一月廿四日

衡氏(花押)

東寺

盛吉(花押)

御公文所

家高(花押)

この二通の注進状によると、上使本位田や三職たちは、百姓たちが寄合開いて、実力で守護使を「おつ立」ようにしたのをおさえて、毎日二〇〇文づつ合計二〇日で四貫文の費用と、守護代への使いの路銭六〇〇文、「しゆんつけ(潤付か)札銭」一貫五〇〇文などを負担し、その上「日別使銭」として二〇貫文催促されたのに対し、本位田から一貫文の太刀と、三職から五〇〇文の札銭を守護使に渡して守護使を荘外へ立ち退かせている。この時、守護使入部に対して支払われた費用は、全額で七貫六〇〇文にのぼっている。

以上の例からわかるように、守護使の入部は、地下にとつて段銭以外に実質かなりの負担増となっており、これが代官及び百姓たちが守護使の入部阻止を強固に東寺に要求した要因である。荘園における段銭納入の方法を荘園領主が国済ではなく京済を主張する要因としては、先述したように従来は荘園領主が荘園の一元支配を守るためだと考えられてきたが、それと共に在地の側の要因として、守護使入部が地下のかなりの負担となっていたことも見逃せない要因であると考ええる。

しかし、幕府と荘園領主との間で、京済が決定されたとしても、それだけで在地での段銭の催促が停止されるわけではなかった。先掲の代官岡の注進状で、彼が「国にて半分可被納之由郡代へ内藤方之折帛を被召候て、可有御下候。只 公方之請取計自然御下候てハ、郡代定不可致承引候」と述べているごとく、公方(幕府)の段銭請取状だけでは、

表① 段銭入足内訳表

A 1449年一井谷段銭入足一円分		B 1451年一井谷段銭国済納入足事	
項 目	貫文(文)	項 目	貫文(文)
京進	20000	両納所礼分	600
配符注進之時夫上粮物	300	日請侘事	500
同又さいそく夫上	350	内えん方礼	300
同配符の時わら銭出之	100	同五郎太郎礼	200
一所分出之	1000	同酒	350
八上礼さいた方へ	500	度々雑用	310
八上なんは方へ礼	300	高畠方礼	200
已上小行方へ礼	200	銭借方礼	200
段銭奉行御方へ礼	2000	京都注進雑用度々入足	1900
やまちとのへ礼	500	段銭本銭分此内一所一貫	
そうしゃ二方へ礼	400	百文加是分	31100
中間方へ礼	200	銭みよ代	625
はうかへ雑事	350	納所公文所礼	600
銭もち夫へ人上	500	中間	300
関出之	60	力者	100
		けんし	75
		夫銭小目銭分	45
合 計	26750	合 計	37405

※上表は、『大山村史』史料編・大山荘地下算用状(440)・大山荘一院谷国役入足地下立用注進状(453)をもとに、作成したものである。()内の番号は、『大山村史』の史料番号である。

在地での郡代たちの催促は停止せず、次のような守護代からの催促停止命令の遵行状が出されて初めて在地での催促が停止される。

丹波国東寺領段銭事、可為京済上者、任
 今月十九日御奉書旨、可被止国催促候者
 也。仍、状、如件。

長禄元

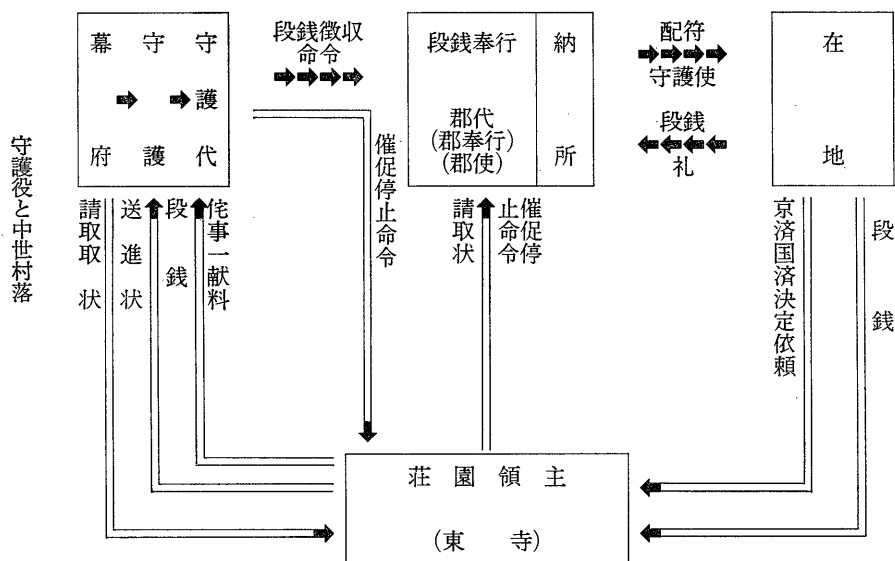
内藤弾正忠

十二月廿一日

之貞

産田式部殿

この書状の差出人の内藤之貞は当時丹波国の守護であった細川勝元の守護代であり、宛名の産田式部は丹波国の多紀郡の郡代である。このように郡代たちが幕府の段銭請取状よりも、守護代からの命令を優先させていたことは、実際の段銭收取の場である在地では、段銭收取の実力者が幕府ではなく守護であることを、郡代たち守護の被官はもちろん、領家方の代官や百姓たちも、はっきりと認識していたことを示しているのではなからうか。



図② 段銭収取経路図

以上述べてきたほかにも、在地では段銭賦課に際し、段銭以外に様々な負担を守護方に対し、払わなければならなかった。その負担の一例を示したのが表①である。A・Bの項とも一井谷百姓等から東寺に提出された守護役注文の内、段銭に関する部分を表にしたものである。Aの項は京済、Bの項は国済の例である。各項目には意味不明なものも含まれているが、Aの項では、銭持ち夫などの人夫代の他、八上^{やまう}さいた(産田)・八上^{やまう}なんは(難波)方礼のような郡代への礼銭や、小奉行・段銭奉行などへの礼銭が、段銭入足として計上されている。Bの項でも、在地での段銭を納入する際の銭読み代などの経費の他、納所への礼や、その他の礼銭が計上されている。これら段銭以外の経費の性格は、銭持ち夫・関料・銭読み代などの段銭納入にかかる実質経費と、守護方の催促を逃れるための礼銭とに大きく分けられる。またAの項では、京済の為もあってか、段銭納入にかかる実質経費よりも、礼銭の額の方がはるかに上回っている。そしてAの項では、これら段銭以外の諸経費の合計が六貫七五〇文に上っており、その額は段銭二〇貫文の約三四%に当たる。Bの項でも諸経費の合計が段銭

三一貫一〇〇文の約二〇％に当たる六貫三〇五文に上っている。このように在地では段銭賦課に際し、段銭以外にも多額の経費がかかっており、その中でも、守護方の催促を逃れるための礼銭が大きな割合を占めていた。そのうえ、京都での荘園領主による京済のための幕府や守護に対する佗事や一献料なども、結果として在地の負担に転嫁され、段銭に対する在地の負担は、より重いものになっていったといえる。また、このような荘園領主や地下からの佗事などの礼銭は、次第に恒例化し、実質的には段銭に付随した守護役となっていたと言える。

以上述べてきた段銭の收取機構と経路及びその手続きを模式図化すると図②のようになる。この模式図をみながら段銭收取の手順を整理してみると、まず幕府から守護→守護代を通して段銭徴収の命令が下る。命令を受けた現地の段銭奉行あるいは郡代は、在地に配符を入れる。そして守護使が在地に入部してくる。配符を受けた在地では、京済か国済の決定を荘園領主に問い合わせるとともに、守護方の催促を逃れるために、郡代や段銭奉行などに礼銭を送る。そして国済の場合は、在地から納所に直接段銭を納めることになる。一方京済の場合は、京済を得るために、荘園領主は佗事や一献料などを幕府や守護に送る。そして京済が決定すると、段銭は在地から荘園領主に、荘園領主から幕府にと納められる。この時、幕府から荘園領主に対して段銭の請取状が発給される。荘園領主は、在地での郡代などの催促を停止させるため、守護代から郡代宛の催促停止命令の遵行状と、請取状を郡代に送る。以上の手順を経て、一応段銭收取は完了するわけである。

(2) 守護夫役の状況

大山荘庄における守護夫役の状況を概観するため、十五世紀段階の史料に現れる守護夫役の種類を書き上げたのが表②である。この表の夫役の中で、守護が徹発できる夫役として、幕府から認められているものは、炭持夫と瓜持夫の二つだけである。残りのものはすべて守護の恣意的なものといえる。これらの夫役は、炭持夫や京上夫のような日

表② 守護夫役表

	夫 役 名
①	炭持夫
②	瓜持夫
③	わらび持夫
④	あかぬ持夫
⑤	伊勢夫
⑥	月別夫
⑦	京上夫（守護方）
⑧	陣夫・陣日役
⑨	八上日役・まわり夫
⑩	守護代下向夫

※上表は、15世紀段階の史料に現れる大山庄の守護夫役を書き上げたものである。

表③ 京上夫表

氏 名	月	日数	貫高(文)
三郎四郎	2月	14	350
大夫	3月	7	175
助	5月	5	125
大夫次郎	5月	10	250
かもん	6月	10	250
さこ	7月	12	300
庄司	8月	8	200
大夫次郎	8月	12	300
大夫次郎	10月	14	350
かもん	12月	20	500
合 計		112	2800

この表は、宝徳2年（1450）の丹波国大山庄公事銭等入足地下半分立用注文並起請文（ノ函・259）をもとに宝徳2年の京上夫を抜き出したものである。

文書名、文書番号は京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』による。

常的な夫役と、陣夫・陣日役のような戦闘時における臨時的軍役の性格を持ったものに分けられる。以下、日常的夫役と軍役、それぞれの内容について検討してみたい。

日常的夫役の中には、炭持・瓜持夫などの日々の夫役のほか、守護に対する京上夫、守護代に対する夫役、在地の郡代などに対する夫役などがある。そして、一五世紀になると、これらの夫役は毎月のように賦課され、すでに恒常化していた。次にいくつかの夫役の具体的な負担状況をみてみたい。

表③は一井谷百姓の京上夫の負担の様子をあらわしたものである。個々の百姓が毎月の京上夫を交替で負担している。大山庄に於ける守護役は、後に詳しく述べるが、東寺と百姓との間で、半分つつ折半して負担することになっていた。この場合、夫役の一日の費用は五〇文であり、百姓たちの負担分はその半分、夫役一日あたり二五文として貫高に換算されている。そしてこのような守護役の内容を示した注文は、百姓たちが作成し、起請文の形式をとって代

官に提出されたものである。また、守護代に対する夫役としては、宝徳元年（一四四九）に、守護代内藤之貞が大山庄に下向した際に、一井谷百姓たちが夫役一三五〇文（一日二五文と計算してのべ五四日）と、守護代の内藤や、郡代・郡奉行などへの礼錢一二五〇文を負担していることが、同じく百姓たちが作成した守護役注文によって知られる。

次に在地にいる郡代などに対する夫役としては、八上日役・まわり夫がある。八上日役の八上とは、大山庄から東南東へ約五キロメートルの地点に現在同名名の所がある。この地点は、篠山盆地の東の入口に当たり、戦国期の土豪波多野氏の居城である八上城の跡が現在でも残っている。このようなことから推察すると、八上日役の八上とはこの地名をさすものと考えられる。そして今谷明氏がすでに指摘されていることだが、大山庄の算用状に「八上れいさいた（産田）かたへ」・「八上⁽²⁷⁾なんは（難波）へれい」・「八上奉行礼二人」というように、八上と郡代らの名とがセットで現れることから推察して、この八上の地に郡役所が置かれていたと考えられる。

表④は、史料上に現れた八上日役・まわり夫の負担の様子をあらわしたものである。まわり夫が確認できるのは宝徳元年（一四四九）だけであるが、この八上夫役の場合も夫役の費用は一日五〇文で計算されている（貫高は、百姓の負担分で一日二五文）。この八上日役の内容であるが、「八上日役⁽²⁹⁾なんは（難波）方いゑ（家）作之時やとい夫事」という小奉行難波の個人的な夫役が八上日役としてあらわれていることから考えて、八上日役の性格は、郡代たちのかなり恣意的な夫役だったと考えられる。そしてこのような郡代たちの恣意的な夫役の存在は、彼らの武力を背景とする領域的支配権の一定度の確立を示していると考ええる。

同様の夫役の例は、大山庄に限らず他の東寺領荘園においてもみられる。

⁽³⁰⁾ 太良庄庇永廿一年守護方入目之事

領家方御分 三分二之定

一貫六百文

九世戸夫二人

表④ 八上日役表

氏 名	1448年		1449, まわり夫		同年日役		1450年		1451年	1452年	1453年	
	日数	貫高	日数	貫高	日数	貫高	日数	貫高	貫高	貫高	日数	貫高
掃部	7.5	200	18	450	14	350	9	225	200	475		
堀田左近	7	175	5	125	3	75	4	100	150		4	100
天神三郎四郎	6	150	9	225			5	125	250			
芋谷大夫	4	125			12	300						
助	3	75			6	150	4	100	150	150	10	250
大夫	8	225					4	100	175	150		
あつき衛門	4	100	6	150	6	150			100	75		
左近五郎	3	75	4	100	3	75	3	75	150	150		
庄司	4	100	4	100	4	100			125	100	8	200
渡次郎	4	100			3	75			50			
大夫次郎	4	100	6	150	4	100	5	125	125			
ヲハナ大夫太郎	4	100	11	275			8	200		300	20	500
むまの太郎			11	275								
ゆや上掃部			18	450	3	75					35	875
迎さこ			7	175	6	150			175	175	3	75
ひこ三郎			7	175	3	75	5	125	150		12	300
兵衛五郎			7	175	3	75	7	175	225	175		
れこ谷大夫							3	75				
三郎五郎							3	125		150	7	175
道然入道							3	125				
西大夫									150			
孫三郎									75	150		
大塚かもん									125			675
さえもん太郎									150		27	
奥坊									125			
口もん									125			
田中のしやうし											4	100
ほり田孫三郎											6	150
大江かもん											25	625
地下分									200			
合 計	61.5	1525	113	2825	70	1750	71	1775	2975	2050	161	4025

※人名が同一人かどうか確定できない場合があります、日数・貫高に多少の誤差があると考え、ほぼ八上日役の実態を表していると考え。

※夫役は一日50文換算で、貫高の項は地下半分立用分。

※上表に、丹波国大山庄守護役地下半分注文（に函・183）・丹波国大山庄一院公事足地下半分注文（二函・189）・丹波国大山庄公事銭等入足地下半分立用注文並起請文（ノ函・259）・丹波国大山庄一院谷国役入足地下半分立用注文（に函・198）・丹波国大山庄一院谷国役入足地下半分（ノ函・274）・丹波国大山庄段銭並守護役文書（に函・211）をもとに作成したものである。文書名・文書番号は、京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』による。

二貫文 三方下向時、礼

一貫四百文 三方上洛時、夫二人

二貫文 馬夫四人

六百六十五文 新守護代礼

四百六十五文 守護代上洛之時、夫

以上八貫百三十文

同地頭方御分三分一定

八百文 九世戸夫一人

一貫文 三方下向時、礼

七百文 三方上洛時、夫一人

一貫文 馬夫二人

三百三十二文 新守護代礼

二百文 守護代上洛時、夫

以上四貫三十二文

(後略)

この若狭国太良庄の応永二年(一四一四)守護役注文は、代官が作成したもので個々の百姓の負担の様子は記載されていないが、これによると、太良庄では守護役を領家方が三分の二、地頭方が三分の一、それぞれ分けて負担するようになっていたようである。当時の若狭国の守護は、一色義貫であり、守護代は、一色氏の被官である三方氏であった。ここでも「久世戸夫」・「三方上洛時夫」・「守護代上洛時夫」・「馬夫」などの夫役が守護方より賦課され、略し

表⑤ 陣 夫 役 表

	但馬陣夫(人) (1390年)		播磨陣夫(日) (1445年)				文明陣夫(日) (1482年)
人 名		人 名	陣夫	陣日	合計	人 名	
藤内	46	堀田さこ	18	5	23	い屋上大夫	77
妙覚	58	三郎四郎	36	11	47	兵衛次郎	39
行岡	41	上天神衛門	25	10	35	芋谷大夫	37
出合馬	36	西谷大夫	36	7	43	おはな大夫	56
惣内	42	西谷助	25	6	31	大家大夫	33
左近	68	かもん	63	19	82	小豆谷衛門	30
妙本	112	さこ	23	7	30	東大夫	13
衛門	77	兵衛三郎	19	7	26	浄徳	17
サイノ平内	42	大口兵衛	27	8	35	田中二郎三郎	16
行恒	43	左近五郎	13	5	18	与二郎	12
定阿弥	37	いも谷大夫	33	12	45	天神大夫	13
湯屋谷	5	おはな大夫大郎	33	13	46	い屋谷大夫	17
アツキ谷	20	田中大夫三郎	12	6	18		10
岸入道	42	大夫二郎	27	9	36		
源内	40	細田方	12		12		
天神左近	62	野臥	12		12		
合 計	771	合 計	414	125	539	合 計	370
夫代(1人30文)	22貫650文	夫代(1人50文但し陣夫のみ)				夫代(1人50文)	18貫550文

※播磨陣夫は、一井谷分のみ。

※上表は、明徳元年丹波国大山庄年貢地下算用状(「東寺百合文書」ノ函99), 文安二年丹波国大山庄一井谷陣夫文書(「東寺百合文書」に函163), 文明十四年丹波国大山庄陣夫注文(「東寺百合文書」に函238), により作成したものである。文書名・文書番号は、京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』による。

て記載しなかった諸役の額も含めると、この年の太良庄の守護役の合計は、一六貫九三二文にのぼっている。その他の東寺領莊園では、例えば播磨⁽¹⁾国矢野庄では、守護赤松氏から毎年のように守護夫役が賦課されていることが、その算用状から知られる。また、山城⁽²⁾国上・下久世庄・上野庄・植松庄などでも守護夫役の存在が確認される。

次に軍役である陣夫について、大山庄では、明徳元年（一三九〇）・文安二年（一四四五）・文明一四年（一四八二）の三通の陣夫注文が残っている。表⑤はこの三度の陣夫の負担状況を示したものである。明徳元年の陣夫は明徳の乱に際し当時の守護山名氏清が賦課したものである。文安二年の陣夫は、注文に「播磨向陣人足入目」とあることから、赤松満政討伐のために、守護細川勝元から賦課されたものと考えられる。また文明一四年の陣夫は、守護細川政元が畠山義就討伐のために賦課したものと考えられる。表⑤の陣夫の日数からわかるように、陣夫の場合は他の夫役、例えば八上日役に比べて個々の百姓が負担している夫役の日数が多くなっている。

では陣夫の具体的な負担状況をみることにする。

陣夫⁽³⁾之注文之事

合 文明十四年正月吉日始

正月 日数廿三日京夫之分日数十九日とん田へツムル分十三日山サキニツムル分日数八日陣ニ

ツムル分又十四日京ニツムル分

い屋上大夫

以上七十七日

同月 日数八日北方ニツムル分日数八日ヤマサキニツムル分日数十五日とん田ニツムル分

兵衛次郎

以上日数三十九日

五月 日数十四日山サキニツムル又十四日とん田ニツムル日数九日とん田へツムル

芋谷大夫

以上三十七日

六月 日数十八日ヤマサキニツムル日数十八日京ニツムル

おはな大夫

以上日数三十六日

(中略)

七月 日数十七日山サキニツムル

東大夫分

同月 日数十六日山サキとん田ニツムル

浄徳分

(後略)

この注文は、表⑤の文明一四年の陣夫注文である。注文の「山サキニツムル」・「京ニツムル」・「とん田ヘツムル」などの記載からわかるように、百姓たちは京都・大山崎・摂津富田などへ実際に行ってそこに駐留している。百姓たちは、兵糧の運搬や陣地の構築などに従事し、実際に戦うことはなかったと思われるが、陣夫の場合は、百姓たちとはたとえ遠方であっても戦地まで行ってそこで長期間駐留を強いられた。そしてそれは百姓たちにとって、長期間耕作現場から引き離されることを意味している。い屋上大夫のように、一ヶ月に七七日も陣夫を負担している場合は、本人以外の下人などを陣夫に送り出していることが考えられるが、百姓本人が陣夫に駆り出される場合、あるいは下人が送り出される場合も、百姓たちの農業経営において、陣夫が大きなマイナスになっていたことは確かであろう。陣夫は臨時的な夫役であるが、百姓たちにとって、戦闘に参加することはないといっても当然生命の危険をとまなうとともに、長期間耕作現場を離れざるを得ず、他の夫役に比べその負担はかなり重いものだったと言える。

他の荘園の陣夫の例としては、矢野庄の「江州陣夫」⁽³⁴⁾がある。この陣夫は、足利義尚が近江の六角高頼討伐に際し、播磨の守護赤松政則によって賦課されたものである。また、太良庄においても陣夫の存在を示す史料がみられる⁽³⁵⁾は、少し性格は違いが、上・下久世庄の沙汰人にも、国役として守護方から軍役が課せられている例がみうけられる。

以上、大山庄における守護夫役についてみてきたのであるが、この他に二点付け加えておきたい。第一点は、これ

らの守護夫役が夫役の内容は年によって変化するが毎年賦課され恒常化しているということである。第二点は、守護夫役の恒常化にともなって、段銭の場合と同じように、夫役軽減のための郡代などへの礼銭も「八上春之礼銭」⁽³⁷⁾というように恒例化し、実質的な守護役に変化していたことである。

最後に大山庄における守護夫役の負担者と、賦課基準について考えてみたい。次の申状は、守護夫役に関する一井谷百姓等のものである。

⁽³⁸⁾東寺御領丹波国多紀郡大山庄内一院谷御百姓等謹言上

抑守護御方人夫の事、当年正月より六月に至まで二百五十余人被召仕候。但日数分。御領之百姓分八人之処にて候に、如此人夫被召仕候間、たとい毛お付候とも御百姓等安堵難仕候。所詮急速御成敗あつかり候へす候へ、地下難足立候。此旨預御披露候者、畏入候。恐惶謹言。

六月十一日

一院谷御百姓等

御奉行所

年未詳であるが、この申状によると、一井谷ではこの年正月から六月の初めまでの五ヶ月間で、守護夫役が二五〇余人賦課され、それを「御領之百姓分八人之処にて候に、如此人夫被召仕候間」とあることからわかるように、百姓身分の者八人が負担している。また先掲の表④の八上日役や、表⑤の陣夫の負担者の人名の多くが、一井谷百姓としての他の史料に現れることや、表③のような夫役の注文が、百姓たち自身の手によって作成されていることから考えて、夫役の負担者は百姓身分の者であったと言える。

では、これら百姓に対する守護夫役の賦課基準はなんであったのだろうか。この点に関しては、不明な部分が多く、推測の域を出ないが、第一の可能性として考えられることは、それぞれの百姓の耕作面積である。田沼氏は、中世の諸権力の土地把握を、「公田体制」という概念で捉えられ、「公田」が、荘園領主・守護権力の収奪の基準となつて

いたと述べられている。また、柳千鶴氏は、文明年間に山城国で畠山義就が荘園領主たちに指出を命じていることから、守護権力の土地把握の存在を指摘されている。しかし、大山庄の場合、例えば、永享九年（一四三七）の東寺の内検帳に記載されている一井谷の百姓たちの耕作面積と、表⑤の播磨陣夫の負担日数を比較してみると、まったく比例しておらず、また、陣夫の負担者に、内検帳には記載されていない人名が現れることなどからみても、「公田」として把握された個々の百姓の耕作面積が、そのまま守護夫役の賦課基準になっていたとは考えがたい。ただし、百姓たちが、地頭領や、その他の領地で耕作しているケースも考えられるので、内検帳と一致しないからといって、耕作面積が、基準になっていなかったとは言いい切れない面もある。時代はやや下がるが、永正五年（一五〇八）と推定される一井谷百姓等申状によると、「当村事、長塩備前殿御給候とて、去廿六日ニ御代官入部候刻、指出等切々ニ被仰付候間、昨日廿七日ニ仕候て出候」と、この年七月に丹波国の守護職に就任したばかりの細川高国の代官として入部した長塩元親が、百姓たちに指出を命じている事実がみられ、守護の独自の土地把握動きが知られるが、一五世紀段階で、大山庄において守護が独自に百姓たち個々の土地を把握していた事実は管見の限りではみられない。

第二に考えられることは、村落に対して一括して守護夫役が賦課され、それを百姓たち自身が村落内部で分担して負担するケースである。先にも指摘したように、個々の百姓の夫役の負担分の詳細な注文が、百姓たち自身の手によって作成され、提出されている点や、当時の守護権力の独自の土地把握の未熟な状況から考えて、この方法がとられていたと推測するほうが妥当だと思われる。そしてこの場合、夫役の明確な賦課基準などはなかったのではないかと考える。

以上、守護夫役の賦課基準について二つのケースを想定してみたが、どの様な基準で夫役が賦課されていたのかは、現段階でははっきりとしない。ただ最後に指摘しておきたいことは、百姓身分のものが夫役の負担者となっている点、また夫役注文が百姓たち自身の手によって作成されている点から考えて、守護夫役の賦課・負担は、百姓を中心と

した中世村落の機構を通じて行われていたということである。そしてその面では、守護夫役も段銭同様、荘園制の枠組みを通して収取されていたものと言える。

二章 守護役と百姓と荘園領主

(1) 守護役折半の方法

大山庄における守護役は、先にも触れたが、地下の百姓と東寺の間で折半し、半分づつ負担することになっていた。文明一七年（一四八五）に二〇貫文の段銭が一井谷に課せられ、東寺の上司がその半分の負担を聞き入れなかったとき、東寺の公文所宛に提出した申状の中で百姓たちは、「抑大山一院谷守護役等御公事、往古より寺家半分地下半分めされ仕候事にて候」と述べ、東寺に段銭の半分一〇貫文の負担を要求している。このことからわかるように、大山庄では守護役の折半は往古の例として、東寺と百姓たちの間で認識されていた。また、この折半の習慣は、百姓と東寺の間に取り交わされた一種の契約であったと言える。同様の折半の例は、矢野庄においてもみられるが、他の東寺領荘園においてはこのような例はみられず、東寺が守護役の折半を制度として全ての荘園に取り入れていたわけではない。そして、このような折半の契約は、それぞれの荘園における東寺と百姓たちの力関係によって交わされたものだと考えられる。実際この時、上司が守護役の折半の契約を守ろうとしなかったことに対し、百姓たちは、代官の中沢元基に頼んで添状を出してもらい、契約の履行を東寺に認めさせている。

つづいて、守護役の折半の方法をみてみたい。次の請文は、大山庄における守護夫役の費用に関して、百姓さ七郎・孫二郎が応永二六年（一四一九）に提出したものである。

⁽⁴⁵⁾ 大山庄御百姓請文条々事

一、守護役むかしより一日分三十文ニ宛申て、此内率分地下沙汰申候お一日お五十文ニ宛候て、又一ゑんに公方へかけ申事あるましくて候。

(後略)

この請文にみられるように、むかしから大山庄では、夫役一人一日につき三〇文と取り決められていた。この三〇文という額は、守護夫役の人夫一人分の食費という形で嘉慶二年(一三八八)の大山庄地下引物并未進注進状にすでに現れている。当時の丹波国の守護は山名氏清であり、大山庄における守護夫役はこの時期にはすでに一人一日三〇文と決められていたことが確認できる。ただし、この三〇文という額は、応安七年(一三七四)の大山庄の算用状⁽⁴⁷⁾によると、どうやら当時は一日二〇文であつたらしく、細川持之が守護だつた永享二年(一四三〇)の守護夫の注進状⁽⁴⁸⁾は一日四〇文、先にみた文安二年(一四四五)の播磨陣夫より以降は一日五〇文となっており、時代が下がるにつれて増えていることがわかる。

次にこの三〇文という額であるが、この額は、一見、夫役に対する日当のように思われ、また今までの研究⁽⁴⁹⁾でもそう考えられてきた。しかし、結論からいうとこの三〇文という額は日当ではない。この三〇文という額は、先の請文からわかるように、東寺と百姓の間で取り決めた額であり、年貢から夫役分を折半して差し引くための夫役の換算基準として、定められた額である。つまり、書類上の金額であり、この金額が、実際に夫役の日当として百姓に支払われたわけではないのである。また、実際、夫役を課している守護方は、この額についてはまったく無関係であり、守護が人夫を雇う例はあるが、夫役を課した百姓に、日当を払うことなどない。もし、守護が日当を払っているのなら、それは夫役ではなく、雇用と言ふべきである。

このような夫役の換算基準をもとに、百姓たちは、次のような守護役の内訳を書き上げた守護役注文を代官に提出する。

(50)

守護役地下半分立用注文

文安五年分

文安四年十二月夫

文安五年分

四日 二百文

天神三郎四郎

同十二月夫

四日 二百文

あつき衛門

文安五年分

四日半 二百廿文_{五文}

西谷大夫

五日同 二百五十文

助

(中略)

以上三貫二十九文

一、□上_(八)

日役夫半分立注文

三日半

七十五文

かもん

三日

七十五文

さこ

三日

七十五文

三郎四郎

三日

七十五文

いも大夫

(中略)

以上一貫五百四十二文

半分

六百文

京上夫大夫太郎

さこ二人分

半分

三百文

京上夫かもん

半分

一貫五百文

(猿樂棧敷)
さるかくさしき三間分

半分

三百文

わひ事奉行方へ

半分

五百文

日役夫惣庄

半分

三貫三百文

すみ持ちうり持
月別夫

以上六貫五百文

(中略)

半分

二斗六升四合

(催)
八上さいそく時下用

四斗八升代六百文

(春礼銭)
八上はるのれいせん

以上七斗四升四合

半分

一、五貫七十三文

一反別六十二文宛
一井谷反銭分

(中略)

以上

一、和市

百文ニ八升宛

此分いつはり申候へ、日本国中の大小神、当庄六所明神、ことにハ、大師八幡の御罰を、御百姓まかりかう
ふり申へきにて候。よんてかうもんの状、如件。

かもん（略押）

さこ（略押）

助（筆印）

（以下署名者五名略）

文安五年十二月 日

御代官殿

進之候

この注文では、夫役は一日五〇文として換算されている。そして、八上日役夫・京上夫・炭持・瓜持夫・段銭などの地下負担分が、「半分〇〇文」という形で計上されている。この「半分〇〇文」の額が、百姓の守護役の負担分を示している。注文の最後では、その時の和市が記載され、注文に偽りのないことを百姓らは告文（うりごみ）の形で誓っている。そして百姓らは、この和市に応じて守護役の負担分を東寺に納める年貢の中から差し引くのである。またここでもう一つ指摘しておきたいことは、この注文の守護役の費用は、先にも触れたが、署名者をみればわかるように、百姓らの自己申告によるものであり、代官をはじめ東寺方は、まったくその実体を掴んでいなかったということである。

続いて代官は、このような注文をもとに東寺へ納める年貢から守護役の地下の負担分を差し引いた旨を記した算用状を添えて、年貢を東寺へ納める。このようにして、東寺と百姓たちの守護役の折半が、完了するわけである。

つまり、守護役を折半して負担するということは、一見、東寺と百姓が半分ずつ守護に対し守護役を負担しているように思われ、従来の大山庄の研究でもそう考えられていたが、実際は、守護役の大部分を直接負担しているのは百姓たちであり、百姓たちは、負担した守護役の半分を東寺に納める年貢から差し引くことによって、東寺との守護役の折半を行っていたのである。そしてこれまでみてきたように、このような守護役折半の方法は、東寺と百姓たちと

表⑥ 守護役表

年号	A守護役	B年貢高	A/B (%)	未進 率(%)	寺納高
1374	20石2斗3升	76石1斗1升8合	26.6	12.2	49石2斗1升1合2夕
1380	6石9斗8升9合4夕	同上	9.2	14.8	61石2斗6升1合
1381	5石6斗5升4合	同上	7.4	18.9	48石9斗6升1合1夕
1388	21石5斗9升	同上	28.4	9.7	?
1390	30石3斗7升2合	同上	39.9	12.9	25石4斗4升9合
1396	14石6斗2升5合	同上	19.2	10.4	15石6斗6升5合
1419	13石8斗2升1合2夕	67石5斗4合	20.5	2.0	9石2斗8升8合
1427	22石5斗	同上	33.3	5.2	5石
1428	21石1斗2升8合6夕	68石3斗1升5合	30.9	15.4	26石2斗2升5合
1430	16石9斗9升7合	67石5斗4合	25.2	?	7石3斗9升
1431	21石7斗4合3夕	同上	32.2	3.5	2石7斗
1436	4石6斗8升2合	22石9斗3升	20.4	?	?
1438	12石6斗7升7合	54石5斗2升6合	23.2	3.9	6石5斗1升
1445	18石2斗9升7合	49石4斗6升6合	37.0	17.0	8石4斗8升
1446	12石1斗2升6合1夕	56石2斗5升6合	21.6	6.7	23石4斗1升1合
1453	34石8斗8升3合2夕	56石5斗4升6合	61.7	7.2	7石

※守護役高は地下分立用分

※上表は大山庄における供僧方支配（大方分）の年貢算用状（東寺百合文書）をもとに作成したものであり、大山庄における全ての守護役の状況を表した物ではないが、大体の状況は示していると考えられる。

の間で取り決められたことであり、守護はいっさい関係はないのである。

(2) 守護役と百姓

大山庄における守護役と年貢の関係を表したものが、表⑥である。A守護役高は、地下半分立用分であり、実際の守護役高はこの倍になる。B寺納高は、年貢から守護役分・減免分・未進分を差し引いた残りで、実際に東寺へ納められた年貢である。A/Bの項は、守護役高割る年貢高の割合を百分率で表したものであり、百姓たちの守護役による負担増の割合を示したものである。この表からわかるように、守護役高は一定しておらず、毎年かなり変動している。このことは、守護の経済基盤の不安定さを物語っている。また、寺納高は一五世紀にはいると急減して

おり、この時期からの東寺の支配の形骸化が進んだ事を示している。百姓の守護役による負担増の割合をA/Bの項でみてみると、最低七・四%最高六一・七%と幅があるが、ほぼ二〇〜三〇%代の値が多く、平均二七・三%となっている。つまり、統計上では、大山庄の百姓たちにとって、守護役は、毎年平均二七・三%の負担増になっていたわけである。

では実際守護役の負担は百姓たちにとってどのようなものであったのであろうか。具体的な例をいくつかみていきたい。文安元年（一四四四）の守護代内藤之貞下向に際し、その礼錢など六貫文の扶持を代官に願ひ出た一井谷百姓等申状には、「お中之事ハうゑかつへ（飢え餓え）候て、用之夫日役之事さへ仕かね候間、かやう新足ハ一錢も秘計を仕候ハする事あるましく候。（中略）夫日役仕候事かすをしらす候。」と、夫役の多さと、生活の窮状が述べられている。至徳三年（一三八六）の公文法橋快秀の書状には、「抑庄家事、てうさん（逃散）仕候て、さらに無正躰候間、則下り候て、先百姓を入おきて候。行恒事、守護方より役をかけられ候て、ちくてん（遂電）仕て候。」と、百姓が逃散してしまつて、地下が正躰なくなつてしまつていふことと、行恒という百姓が守護役により遂電してしまつたことが述べられている。この行恒という百姓は、応安四年（一三七二）の名寄帳によると、庄内第二位の一町七反三〇代の耕作面積を保有しており、また、鎌倉期からその名をみることで、代々続いた古くからの有力百姓の一人である。そして、このようなある程度経済力のある百姓でも、守護役の負担に耐えきれず、自己の経営を崩壊させてしまふことがあることを、この行恒遂電の例は示している。また、時代は下つて明応四年（一四九五）の一井谷百姓等申状では、「伊勢夫之事、いせん（以前）ハ、仕たる事へさらになく候。迷惑にて候。さりながら、人足をは勤申さす候へ共、ろせん（路錢）ともニ、一ゑんに御させ候により、御百姓かけおち（駆落）仕候。反錢之事、先き（規）ハ、五十文より上ハ、仕たる事なく候。いま殿様の御代、過分おほせ付られ候。百姓中ゆふ（裕）あるほとは、おほせにしたひかい候。いまハ御百姓事外無力仕候。」と、守護の伊勢夫については、今まで負担したことがないので出さな

つたが、するとその路銭が賦課されてきたので、駈落ちしたこと。また、段銭は一反につき五〇文以上は出さなかったのに、今の殿様（この時の守護は細川政元）の代になってから過分に負担させられていること。そして百姓が余裕のある内は負担していたが、今では、もうその力もなくなってしまうことが述べられている。この例は、一五世紀も末になると、守護役の負担が、以前にもまして重くなってきていることを示している。そして、この申状に添付された付箋には、「百姓おはなの大郎二郎・ほり田の三郎大郎・ひうしこうの大夫、此三人ハ名をまいらせあげ候」と、三人の百姓が、名を東寺へ返上したことが記されている。この三人の百姓たちが名を東寺へ返上した理由は、名を維持できなくなるほど、守護役が厳しかったことによるものだと考えられる。

これらの例は、百姓たちにとって守護役の負担が、莊園領主の年貢と相まって、場合によれば、自らの経営を崩壊させるほど過重なものであったことを示していると言える。

(3) 百姓と莊園領主

前節では、百姓たちにとって守護役の負担が厳しいものであったことをみてきたが、では百姓たちはこの守護役の負担から自らの経営を守るためにどのような手段をとっていたのであろうか。

百姓たちは、守護役から自己の経営を守るために、おもに東寺に納める年貢を軽減する手段に出た。まず、守護役の折半である。これは、先述したように守護役にかかった費用の半分を年貢から差し引き、実質的に守護役の負担を半減させるものである。また、百姓たちは、この折半の契約を利用して東寺側からみれば、色々不正を行っていたようである。例えば、先にみた夫役を一日三〇文として換算すると言う請文の後半で、「一日お五十文ニ宛候て、又一ゑんに公方へかけ申事あるましくて候。」と、夫役の額三〇文を、五〇文に換算して差し引かないこと、またその全額を東寺の負担にしないことを約束している。このことは、百姓たちが夫役の費用を多めに換算したり、半分以上の

夫役の額を東寺に請求していたことを示している。實際、夫役の一日当りの額が徐々に増額されていることは、さきに触れた通りである。このように、百姓たちが不正を行えた理由は、先にも指摘したが、守護役の費用が百姓たちの自己申告によるものであり、そのため東寺方がまったくその実体を掴んでいなかったためであつたと考えられる。

永享五年（一四三三）の公文法眼が作成した算用状の記載に關して不審な点を指摘した大山庄算用違目事書案では、「富士下向人夫用途五貫文云々。算用状ニハ二十式石七斗四升六合九夕見タリ。仮守護役等少々難引之、巨多之分米□□候間事。」・「播州夫役又五貫文云々。兩國遠近間代錢無増減不審事。」と、年貢から守護役として多額の石高が差し引かれていることや、富士下向夫と、播州夫役が、距離が違うのに同額になっていることがあげられているが、その詳細は掴んでいないようである。また、「田錢事、百姓半寺家半分ハ先規候。一向之寺家分ニ被立用候敷。」と、段錢についても、全額東寺の負担になっているのではないかと指摘はしているが、その対策としては、「入目分毎年代付テ可被進之候事」と、代官には段錢費用の明細の提出を求めているだけである。このように東寺方は、守護役に關しては、独自の有効な把握手段を持つておらず、「守護役等事、一切不可申於寺家之由、自最初所被申役諾之処、毎年号守護役、年貢之不法、無其謂」と、守護役（この場合は、段錢を除いた守護夫役の意味）は、一切寺家に負担させないという代官請負の際の契約に基づいて、結局全てをこの時の地下代官中西明全の不法として責めているのみである。この後、このような不正を正すために、先にみたような百姓の守護役注文の東寺への提出が代官に義務づけられたようだが、守護役注文自体が百姓たち自身の自己申告である限り、このことによって東寺が在地の守護役の実態を掴めたかという疑問である。そして百姓たちは、このように守護役の実態が、東寺方に把握されていないことを利用して、實際の守護役の半分以上の額を年貢の中から差し引くなどの不正を行っていたのである。

また、表⑥の未進率にみられるように、大山庄では毎年のように未進が起きており、その平均は、年貢の約一割に当たる九・六％に達している。このような未進の恒常化に加え、年貢の減免要求も毎年のように繰り返されている。

その他、永享八年（一四三六）大山庄に出雲宮段銭が賦課された際、一井谷の百姓たちは、「段銭可出にて候へ、今度遂電之百姓并に捨田分は主なく候間、自寺家一円ニ可有御沙汰にて候。」とか、「西田井事、是又皆荒にて、御下地ニ主なく候間、自寺家一円に御弁あるべきにて候。」と、段銭を出すのならば、遂電した百姓の分と、捨田分と、皆荒の西田井の分の段銭は、全額東寺に負担して欲しいと、代官に申し出ている。また、先に触れた文安二年の播磨陣夫についても、一井谷の百姓たちは、「当年々作日焼と申、長々陣夫朝夕守護殿御公事と申、百姓計会無是非候。陣夫一円の通無御扶持候者、定御百姓等地下の堪忍ハ難仕候。」と、陣夫の費用の東寺による全額負担を逃散をほめかしながら一四名連署の起請文を添えて、代官に要求している。これらの要求が通ったかどうかはわからないが、ここでも出てくる守護役費用の東寺による全額負担というのは、先に折半の方法で説明したように、東寺が守護役費用を支払うのではなく、百姓たちが東寺に納める年貢の中から、自分たちが負担した守護役費用の全額分を差し引くということである。

以上みてきたように、百姓たちは、守護役による出費分を東寺に納める年貢を減らすことによって補い、バランスをとろうとしていたのである。そして、このような百姓たちの行動が、大山庄における東寺の年貢收取能力を弱体化させ、結果として、東寺の大山庄の支配を形骸化させていった大きな要因の一つであったと考える。

もっとも、百姓たちが東寺の支配の弱体化を全面的に望んでいたのかというと、決してそうともいえない。なぜなら百姓たちが、東寺の直務支配の回復を望む例がみられるからである。次の応永一四年（一四〇七）の一井谷百姓たちの申状はその一例である。

(56)

(前略)

一、夫粮米守護方へ京上田舎分注進申上候。御代官扶持候へて、守護方よりかけられ候まゝに、夫を立て候間、かやうに申上候。

(中略)

一、御代官の依非法ニ御百姓等^(衛)しゆつけ^(計)いつき候て、かくのことく逃散仕て候。御ふちの御たすけにあつかり候て、けんちう仕へく候。先御代官方ニ御知行候は、なかくけんちう仕候ましく候。^(罪科非逃)さいくわひほうおほく候ほとに、かやうに申上候。御代官御寺より御下候て、御百姓等御たすけにあつかり候へ、畏入候。守護方を御かたらい候て、大山庄^(山)へりやうすへ百姓等めしとるへきよしきこゑ候ほとに、おとろき入候てはうはう他国仕候。以此旨、可有御申候。恐惶謹言。

十二月十五日

一井谷御百姓等上

進上 御奉行所

これは、地下代官である喜阿弥の改替を要求したものである。一五世紀になると大山庄では、地下代官の請負が始まり、守護役、中でも夫役は、代官が「廻内外秘計」^(秘)して東寺や百姓には負担をかけないというのが、東寺の地下代官補任の条件となっていた。ところが喜阿弥はそれを負担せず、「守護方よりかけられ候まゝに」夫を立てている。実際、喜阿弥は近くに私領を持つ、守護方と手を結んでいた人物であり、この時も逃散した百姓たちを守護方に頼んで召し捕らうとしている。そしてこの件に関する書状の中で喜阿弥は、「於向後^(後)定守護方公事果^(課)役など可為大事候」と、東寺方に申し述べている。このような喜阿弥の非法に対し、百姓たちは、逃散を以て抵抗するともに、「先御代官方ニ御知行候は、なかくけんちう仕候ましく候」と、喜阿弥の改替を要求し、また、「御代官御寺より御下候て、御百姓等御たすけにあつかり候へ、畏入候」と、寺家代官の下向を願ひ出ている。この結果、喜阿弥は改替されるが、寺家代官は下向せず、守護の被官であったと考えられる稲毛修理亮が、地下代官として登用される。しかし、稲毛に対してもやはり改替要求が起り、稲毛も代官を改替されることになる。結局、この後も大山庄では寺家代官の下向はなく、地下代官の請負が続くことになるのだが、百姓たちは寺家代官の下向をやはり望み続けていた

ようである。東寺の地下代官登用策のねらいは、守護方とつながりのある者を代官にすることによって守護役を軽減し、年貢収入の安定をはかることであつた。しかしこの目論見ははずれ、守護役が軽減されるどころか、かえつて守護権力の荘内への浸透を促す結果になつてしまつた。百姓たちはこのような状況の中で、守護方とつながりのある地下代官の排斥と、東寺の寺家代官による直務支配を求めたのである。

同様に、守護権力の荘内への侵入に対し、荘園領主の直務支配を百姓が望む例は、新見庄においてもみられる。新見庄では、守護細川氏の被官安富智安の代官としての入部に対し、三職以下百姓たちが一味同心して激しく抵抗したことはよく知られているが、その時新見庄の百姓たちは、やはり再三にわたつて、東寺に対し寺家代官の下向を願ひ出ている。

⁽⁶⁴⁾
畏申上候。

抑、備中国新見庄領家御方此方、安富殿御智行候に、去年御百姓等、直寺家より御代官を下候て、御所務候へと、随分御百姓等引入申候処ニ、無其儀、御代官御下なく候へ、一向御領を御りやうと、おほしめし候へぬを、歎入存候、爰ニ幸国中国衙一円ニ召被放候時分、寺家より直ニ御代官を御下候て、御智行候へ、公私目出度候、かやうに御百姓として寺家を寺家と奉存智候に、^(知)無其儀候て、何方ニても候へ、別人之御請ニなり候て、地下を御放候へ、於御百姓ニ候てへ、なん年引候共、承引申ましく候、いそきいそき地下より上申候御使を、めしくせられ候て、御代官御下向候へ、目出度候、諸事重申入候へく候、恐惶謹言、

七月廿六日

新見庄御百姓等

東寺

寺崎殿 御内

この百姓等申状は、代官安富智安の改替と寺家代官の下向を訴えているものであるが、この中で百姓たちは、「御代

官御下なく候へ、一向御領を御りやうと、おほしめし候へぬを、歎入存候」・「かやうに御百姓として寺家を寺家と奉存智（知）候に、無其儀候て、何方ニても候へ、別人之御請ニなり候て、地下を御放候へ、於御百姓ニ候てハ、なん年引候共、承引申ましく候」と、強い調子で寺家代官の下向を要求している。そして、この要求の結果、東寺から上使祐深と祐成が新見庄に下向してくるのであるが、「抑、⁶⁵両御上使、御下向目出度候、皆々御百姓等御目ニかゝり申候、千秋万歳御目出候、さ候間、御書下にハ御上使と仰下され候へ共、御代官と候へねハ、山家者共にて候間、御年貢以下も、無沙汰申候へんする間」と、三職らは、この二人を代官と偽って百姓たちに紹介するのである。このことから、新見庄の百姓たちがいかに強く寺家代官の下向を要求していたかがうかがえる。

結局百姓たちにとって、守護とつながりのある者が代官になることは、守護への負担増につながるものであり、守護の軽減のためには、莊園領主の直務支配の回復によって、旧来の莊園秩序に戻すことが得策だったのである。つまり、百姓たちの寺家代官下向要求の意図は、莊園領主の直務支配の回復によって、守護権力を荘外へ排除することであつたと考えられる。

そして、このような東寺の直務支配による旧来の莊園秩序の回復によって守護権力に対抗しようとする百姓たちの行動こそが、大山庄や新見庄が戦国期まで存続した在地の側の大きな要因だったのでなかろうか。

むすびにかえて

多くの紙数を費やしたわりには最初に設定した目的にどこまでせまれたか心許ないのだが、ここで本稿で述べてきたものを整理しなおしてみることにする。まず守護役、中でも段銭に関して、図②にまとめた段銭納入の手順と、守護使の入部が地下の負担増になっていたこと、また、段銭納入に際し支払われる経費や礼銭などの負担も大きく、特に礼銭は実質的な守護役になっていたことである。守護夫役に関しては、それぞれ守護夫役の実態と、その夫役の

負担者が百姓身分の者であること。そして、その負担が場合によっては百姓の経営を崩壊させるほど厳しいものであったこと。また、その賦課・負担が中世村落の機構を通して行われており、その面では守護夫役も段銭同様、荘園制の枠組みを通して収取されていたことである。守護・荘園領主・百姓三者の葛藤に関しては、従来守護夫役の日当と考えられていたものが、守護役を折半するために、百姓が年貢の中から夫役の負担分を差し引くための換算基準であり、守護は、これに關してはまったく無関係であったこと。そして、このような手段を使って百姓たちは、守護役による出費分を東寺に納める年貢を減らすことによって補い、それらの行動が結果として東寺の大山庄の支配を形骸化させる要因の一つになったと考えられることである。そして最後に、荘園が戦国期まで存続した要因として、荘園の百姓たち自身の中に、守護権力と対抗するために旧来の荘園秩序を維持しようとする要求があり、この要求が荘園を戦国期まで存続させた在地の側の要因だったのではないかと考えたことである。

もちろん従来から指摘されているように、荘園が戦国期まで存続した要因としては、荘園領主の荘園維持政策や、これらの荘園が畿内近国に限られているという地理的なものが大きいと考えるが、本稿で指摘したような在地の側の要因も無視できないものだと考える。

最後に、本稿では守護の荘園侵略の姿を中世村落の側に視点を置いて描いたため、守護権力自体の荘園侵略の論理や行動をみることができなかった。この点に関しては、他日を期すとともに、本稿に關して大方の御批判をいただければ幸いである。

註

- (1) 百瀬今朝雄「段銭考」(宝月圭吾先生還暦記念会編『日本社会経済史研究』中世編所収・吉川弘文館・一九七六年)、その他、同様の研究としては、市原陽子「室町時代の段銭

について——主として幕府段銭を中心に——」(Ⅰ)(Ⅱ) (『歴史学研究』四〇四・四〇五号・一九七四年) などがある。

- (2) 田沼睦「公田段銭と守護領国」(『書陵部紀要』一七号・

一九六五年)、「中世公田体制の成立と展開」(『書陵部紀要』二一・一九六九年)、「室町幕府・守護・国人」(『岩波講座日本歴史』七巻 中世三所収・岩波書店・一九七六年)、その他、同様の研究としては、岸田裕之「守護支配の展開と知行制の変質」(『史学雑誌』八二の一・一九七三年、後に『大名領国の構成的展開』・吉川弘文館・一九八三年所収)などがある。

(3) 守護夫役については、矢野莊の夫役についての研究として、福田以久生「守護役考」(註(1))『日本社会経済史研究』中世編所収)があるのみである。

(4) 中世の大山庄に関する研究は、戦前のものでは、西岡虎之助「荘園における官省符庄の変質」(『社会経済史学』二巻三・四号・一九三二年)、清水三男「東寺領丹波国大山庄・「中世後期における丹波国大山庄の生活」(両論文とも『中世荘園の基礎構造』高桐書院・一九四九年所収)がある。戦後のものでは、宮川満「庄園村落の展開」(『史学研究』第二号・一九五〇年)、服部謙太郎「畿内周辺に於ける封建社会の成立——丹波大山庄の場合——」(『社会経済史学』一六・四・一九五〇年)、田沼睦「南北朝室町期における庄園的収取機構」(『書陵部紀要』一〇号・一九五八年)、「寺社一円所領における守護領国の展開」(『歴史評論』一〇八号・一九五九年)、麻野(協田)晴子「大山荘の番頭制について」(『兵庫史学』一五号・一九五八年)、岡光夫「室町時代丹波大山荘周辺の動向」(一)(二)

(5) 同志社大学経済学論叢「第一巻・二号・一九六一年、大山喬平「鎌倉時代の村落結合」(『史林』四六巻六号・一九六三年)、「中世村落における灌漑と錢貨の流通」(『兵庫史学』二七号・一九六一年)、両論文とも後に『日本中世農村史の研究』・岩波書店・一九七七年所収、中沢栄一「丹波大山庄地名案内」(『兵庫史学』三四・三五合併号・一九六三年)、辰田芳雄「鎌倉末・南北朝期における荘園領主の荘支配——東寺領丹波国大山庄の場合——」(『日本史研究』三三四号・一九九〇年)など、多数の研究がある。また、大山庄の歴史全般については、宮川満編『大山村史』本文編・史料編・一九六四年、がある。その他、現地調査の報告書として、『丹波国大山荘現況調査報告』(一)(二)(三)(四)(五)(西紀・丹南町教育委員会)がある。

(6) 詳しくは、先掲註(4)中沢論文参照。

(7) 丹波国の守護の変遷に関しては、守護代なども含め、今谷明「室町・戦国期の丹波守護と土家」(『守護領国支配機構の研究』第五章・法政大学出版局・一九八六年)に、詳しく述べられている。

(8) この時期から大山庄の算用状に、郡使への酒代や夫役の記事が見え始める。(『教王護国寺文書』四二一・四二六号)

(9) 先掲註(2)田沼睦「公田段銭と守護領国」

(10) 東寺百合文書『大山村史』史料編(以下『大山村史』と

略す・四八〇号

(10) 『教王護国寺文書』五九八号

(11) 先掲註(2)田沼陸「公田体制と守護領国」

(12) 『大山村史』四七九号

(13) 『教王護国寺文書』五九八号

(14) 『教王護国寺文書』一六〇〇号

(15) 『大山村史』三一四号

(16) 『大山村史』四六九号

(17) 『大日本古文書』家わけ第十・東寺文書之二・一—一五六号

(18) 『岡山県史』第二十卷・家わけ史料・東寺百合文書(以下『岡山県史』と略す)・四〇一号

(19) 『岡山県史』四一〇号

(20) 『教王護国寺文書』一六〇〇号

(21) 先掲註(6)今谷論文

(22) 段銭に関する礼銭の例は、太良庄においてもみられる。

次の史料はその一例である。

畏申上候

(中略)

今度之反銭にも、国にて御礼、御奉行へ老貫文、納所へ五百文仕候。其後ふさた仕候とて、譴責を可被入由申候間、重罷出候て、種々忤申候へ共、叶ましき由、堅被申候間、五百文振舞候て、様々忤事申候。彼是式貫文入候。(後略)

(『日本思想大系』二二卷 中世政治社会思想下・若狭太良庄百姓等申状・二二号)

(23) 応永三二年「一四二五」の奉書(『大山村史』三四九号)

によると、瓜持二人・炭持二人の入夫の他は、臨時入夫が停止されている。

(24) 『大山村史』四四〇号

(25) 先掲註(6)今谷論文

(26) 『大山村史』四四〇号

(27) 『大山村史』四四〇号

(28) 『東寺百合文書』ノ函二七四、文書番号は、『東寺百合文書目録』京都府立総合資料館編による。以下同じ。

(29) 『大山村史』四四〇号

(30) 『教王護国寺文書』一〇一一号

(31) 矢野庄の守護夫役については、先掲註(3)福田論文に詳しく述べられている。

(32) 『大日本古文書』家わけ第十・東寺文書之一・一—二三・將軍家足利義満御教書に、「東寺八幡宮領山城國久世上下庄并上野植松庄國役人夫以下臨時課役等事、被免除畢」という記事があり、これらの莊園に夫役が賦課されていた事実が知られる。

(33) 『東寺百合文書』に函二三八

(34) 「江州陣夫」の記事は、『教王護国寺文書』所収の矢野

庄の算用状に散見される。

(35) 『教王護国寺文書』一二六五号に、陣夫に関する太良庄

代官朝賢の書状がある。

- (36) 『大日本古文書』家わけ第十・東寺文書之六・を―四
三・四九

- (37) 『大山村史』四一二号・四三二号

- (38) 『大山村史』五八六号

- (39) 先掲註(2)田沼論文

- (40) 柳千鶴「室町幕府の崩壊課程——応仁の乱後における山城国の半済を中心に——」(『日本史研究』一〇八号・一九六九年)

- (41) 下段の表⑦

この表の田数と表⑤の播磨陣夫の負担日数を比較してみると八年の時間的なずれを考慮にいれても、まったく比例していない。

- (42) 『大山村史』五四二号

- (43) 『大山村史』五一七号

- (44) 『大山村史』五一六・五一七号

- (45) 『大山村史』三三一号

- (46) 『大山村史』二四一号

- (47) 『大山村史』一九七号

- (48) 「東寺百合文書」ノ函一九九

(49) 従来の研究では、文字どおり日当として考えられていた。また、先掲註(3)福田論文では、矢野庄の例において、守護夫役の費用が実際負担した百姓に支払われ、それが夫役を負担する魅力になっていたと述べられているが、

表⑦ 永享九年(一四三七)年大山庄内検帳

地 名	人 名	田 数
坊屋敷	掃部三郎	1町7反20代
里之垣内	道泉	1町 30代
ヲハナ名	?	1町 5代
下天神	衛門	9反40代
大家名	?	9反
行恒名	政所兵衛	8反25代
小西	?	7反5代
芋谷	大夫	7反
西谷	孫大夫	6反45代
里ノ垣内	左近五郎	6反30代
小豆谷	?	6反30代
上天神	政所兵衛	6反15代
レコ谷名	大夫	6反15代
西谷	助	4反25代
堀田	左近	4反
右近屋敷	大夫おはな	3反25代
	西ノ平内	3反25代
小 計		12町7反
西田井分		4反
合 計		13町1反

※右表は、丹波国大山庄内検帳(東寺百合文書に函一四六)をもとに、作成したものであり、文書名、文書番号は、京都府立総合資料館編『東寺百合文書目録』による。

これは、夫役の換算基準を実際の日当と考えたことによる誤解である。

- (50) 『大山村史』四三二号

- (51) 『大山村史』三九二号

- (52) 『大山村史』二三四号

- (53) 『大山村史』一九六号

- (54) 『大山村史』一〇二号など
- (55) 『教王護国寺文書』二〇九九号
- (56) 『大山村史』三三一号
- (57) 『大山村史』三六八号
- (58) 『大山村史』三七三号
- (59) 『大山村史』四一〇号
- (60) 『大山村史』二七九号
- (61) 『大山村史』三三〇号

- (62) 『大山村史』二七八号
- (63) 『大山村史』三一八・三一九号
- (64) 『岡山県史』九五七号
- (65) 『岡山県史』九〇二号

追記

本論文は、一九八七年一二月に佛教大学大学院文学研究科に提出した修士論文を加筆・修正したものである。

